

## 利尻島種富湿原の現状と保全について

小杉和樹

097-04 利尻町杓形字富士見町 利尻島自然情報センター

### Present condition and conservation of Tanetomi swamp in Rishiri Island, Hokkaido

Kazuki KOSUGI

Informative center for natural environment of Rishiri

Fujimi-cho, Kutsugata, Hokkaido, 097-04 Japan

利尻島の比較的大きな湿原は、利尻島南部のオタダマリ沼を中心とする沼浦地区とメヌシヨロ沼周辺の南浜地区にある (Fig 1)。沼浦地区は国立公園区域内で観光地として利用され、南浜地区も公園区域外であるものの木道と案内板の設置などで比較的保全された状況にはある。さらに、小規模な湿原は北部の富士岬地区、旧小黒牧場と本泊地区の海岸にあるが、富士岬地区のものは自転車道の建設により寸断または消失し、本泊地区のものは極めて小規模であるため、消失するのは時間の問題と思われる。

このほか西部の種富町地区に大部分が埋め立てられた湿原がある。現在、この湿原は所有者や近接の利用者の理解と協力により埋め立ては中止され、残された部分を保全することができるようになった。しかし、この湿原の急激な状況は変わらないままであり、その現状と保全について報告する。

なお、埋立の中止と保全、そして木道の設置等今後の土地利用に際しても特段の理解と了承をしていただいた土地所有者の正部川寛氏に心より感謝を申し上げる。

種富町地区の湿原は、埋め立てが始まるまでは面積3.5haで小さな沼なども点在し (Fig 2)、かつては杓形発電所付近一帯も湿原であったと聞く。この湿原は1980年代後半から採石場の表土の捨場や消波ブロック等の製作ヤード、公共

施設の建設用地として埋め立てられたため、現在1.0ha弱が残るだけである (Fig 3)。過去には泥炭採取などもされてはいたが、「やち」とだけ呼ばれ、役に立たない土地として固有名も付けられていないままであり、まずこの湿原を種富湿原と呼ぶことにする。

種富湿原の形成は、周辺に溶岩の流出時に形成された大きなプレッシャーリッジが見られたり、湿原の中にも溶岩流が一部露出していることから、3-4万年前に流れ出た杓形溶岩流の窪みに雨水等がたまり形成されたと思われる。富士岬地区のものも同様であろう。これに対し、沼浦・南浜湿原は利尻山噴火時の爆裂火口跡の窪地に雨水などがたまって形成されたことから、島内では種富湿原の形成時期が一番古いものと考えられる。また、利尻島の湿原は基本的にミズゴケ、ツルクケモモ、ワタスゲなどの植生が共通しており高層湿原に分類される。

種富湿原の存在自体、利尻島の西側に常時水の流れる川や湖沼などがないことから、極めて特異なものといえる。しかし、種富湿原の総合的な調査等はなく、利尻町立博物館と利尻島自然情報センターの断片的な生物調査があるだけである。魚類ではドジョウ、両生類ではエゾアカガエル、トンボ類ではアオイトトンボ、オオルリボシヤンマの記録があり、プランクトンでは高層湿原で稀に記録されるトゲヒルガタワムシ属の1種や等脚類のミズムシもここだけの記

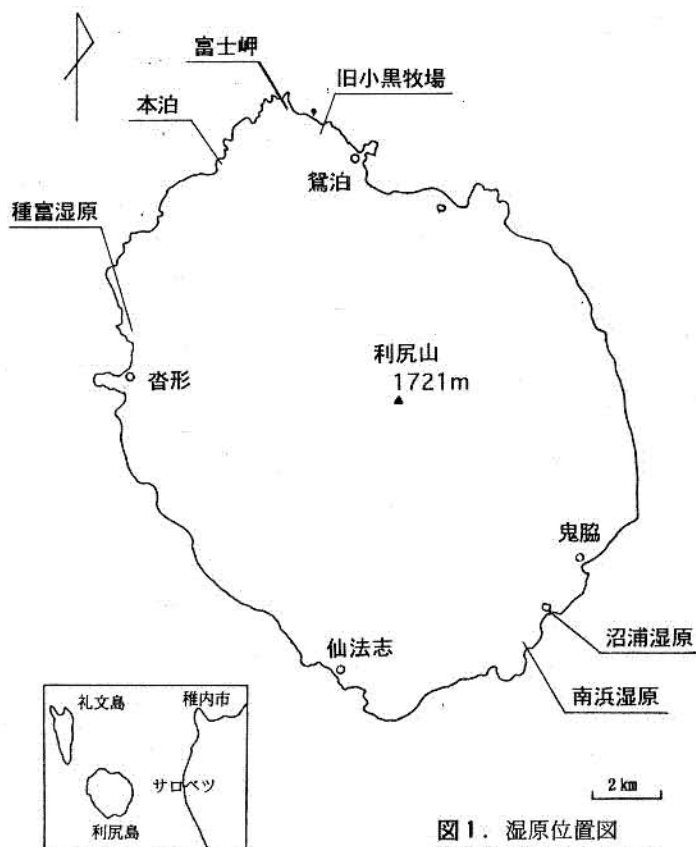


図1. 湿原位置図  
Fig.1. Map of swanp

録である。鳥類ではノビタキやシマセンニュウが営巣し、ハクセキレイ、キマユツメナガセキレイ、カワラヒワ、アオジなどが多く観察され、すこし前までは、ドジョウなどを餌とするサギ類も記録された。

植物では25科56種が確認され (Table.1)、特に1995年6月の確認によって種富湿原の重要性を認識することになったエゾゴゼンタチバナは、利尻島では種富湿原だけに分布する種で、日本でも北海道の道東や道北地方のオホーツク海側の一部に限られており、日本海側での記録は利尻島だけと思われる。

植生を島内の湿原と比較してみると、木本類で共通種が少なく、沼浦・南浜湿原にはアカエゾマツやヤナギ類の高木やエゾイソツツジといった湿地性の樹木があり、種富湿原には、ガンコウラン、エゾヤマハギと矮小したミネヤナギの樹木がある。また、沼浦・南浜湿原にあるミツガシワやミズバショウ、ネムロコウホネなどは

種富湿原にはない。逆に種富湿原にあるショウブは沼浦・南浜湿原には見られない。これらは、湿原の形成時期や風、土壌、沼の有無などの影響によるものであろう。リストからは外してあるが、プレッシャーリッジに分布する種も含めると種富湿原の植生は更に多様なものであることを付記しておく。

残された部分を保全できることにはなったが、雨水や融雪水を水源とするこの湿原では、面積が狭くなることにより、水量の減少と乾燥化は避けられないものと予想される。かつて広範囲に確認されたエゾアカガエルの卵塊は、1996年の春には確認されなかった。また、乾燥化によりメマツヨイグサなどが周辺から侵入し、埋立土砂とともに侵入してきたエゾキケマンなども確認されている。また、点在する沼に分布していたショウブも激減するなど植生は急激に変化し、今後もその進行に拍車がかかるであろう。



図2. 種富湿原 (1984年)  
Fig.2. Tanetomi swamp(1984)

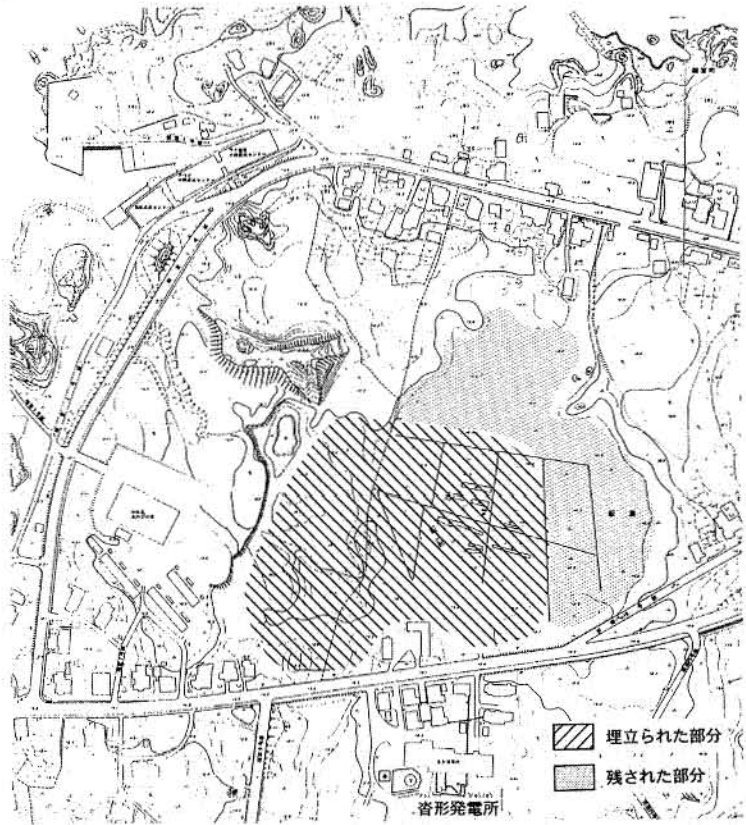


図3. 種富湿原 (1996年)  
Fig.3. Tanetomi swamp(1996)

表1. 種富湿原で記録された植物リスト

Table 1. List of flowers recorded in Tanetomi swamp

科 Families	和名 Japanese name	学名 Scientific name
ゼンマイ	ヤマドリゼンマイ	<i>Osmunda cinnamomea</i>
アカネ	アカネムグラ	<i>Rubia jesoensis</i>
	ホソバノヨツバムグラ	<i>Galium trifidum</i> var. <i>brevipedunculatum</i>
イグサ	スズメノヤリ	<i>Luzula capitata</i>
	エゾホソイ	<i>Juncus filiformis</i>
イネ	クマイザサ	<i>Sasa senanensis</i>
	ススキ	<i>Miscanthus sinensis</i>
	イワノガリヤス	<i>Calamagrostis langsdorffii</i>
	コメガヤ	<i>Melica nutans</i>
	コウボウ	<i>Hierochloa bungeana</i>
	ヌマガヤ	<i>Holiniopsis japonica</i>
	ヨシ	<i>Phragmites communis</i>
オトギリソウ	オトギリソウ	<i>Hypericum erectum</i>
カヤツリグサ	ホロムイスゲ	<i>Carex middendorffii</i>
	ショウジョウスゲ	<i>Carex blepharicarpa</i>
	ヤラメスゲ	<i>Carex lyngbyei</i>
	ホソバオゼヌマスゲ	<i>Carex nemurensis</i>
	オオアゼスゲ	<i>Carex thunbergii</i> var. <i>appendiculata</i>
	クロヌマハリイ	<i>Eleocharis intersiea</i>
	ワタスゲ	<i>Eriophorum vaginatum</i>
ガンコウラン	ガンコウラン	<i>Empetrum nigrum</i>
キキヨウ	ツリガネニンジン	<i>Adenophora triphylla</i> var. <i>japonica</i>
キク	アキノキリンソウ	<i>Solidago virgaurea</i> var. <i>asiatica</i>
	カセンソウ	<i>Inula salicina</i>
	トウゲブキ	<i>Ligularia hodgsonii</i>
	イワヨモギ	<i>Artemisia gmelini</i>
	オオヨモギ	<i>Artemisia montana</i>
	キタノコギリソウ	<i>Artemisia montana</i>
	ヤマハハコ	<i>Anaphalis margaritacea</i>
キンボウゲ	ヒメイチゲ	<i>Anemone debilis</i>
	ミツバオウレン	<i>Coptis trifloria</i>
	アキカラマツ	<i>Thalictrum minus</i> var. <i>hypoleucum</i>
ケシ	エゾエンゴサク	<i>Corydalis ambigua</i>

科 Families	和名 Japanese name	学名 Scientific name
ケシ	エゾキケマン	<i>Corydalis spociosa</i>
サクランソウ	ヤナギトラノオ	<i>Lysimachia thyriflora</i>
	ツマトリソウ	<i>Trientalis europaea</i>
サトイモ	ショウブ	<i>Acarus calamus</i>
セリ	エゾボウフウ	<i>Aegopodium alpestre</i>
	シャク	<i>Anthriscus sylvestris</i>
	エゾノヨロイグサ	<i>Angelica anomala</i>
ツツジ	ツルコケモモ	<i>Vaccinium oxycoccus</i>
ナデシコ	オオヤマフスマ	<i>Moehringia lateriflora</i>
	エゾカワラナデシコ	<i>Dianthus superbus</i>
ニシキギ	ツルウメモドキ	<i>Celastrus orbiculatus</i>
バラ	ホロムイイチゴ	<i>Rubus chamaemorus</i>
	ナガボノシロワレモコウ	<i>Sanguisorba tenuifolia</i>
	キジムシロ	<i>Potentilla fragarioides</i> var. <i>major</i>
マメ	センダイハギ	<i>Thermopsis lupinoides</i>
	クサフジ	<i>Vicia cracca</i>
	エゾヤマハギ	<i>Lespedeza bicolor</i>
ミズキ	エゾゴゼンタチバナ	<i>Cornus suecica</i>
モチノキ	ハイイヌツゲ	<i>Ilex crenata</i> var. <i>paludosa</i>
ヤナギ	ミネヤナギ	<i>Salix reinii</i>
ユキノシタ	ノリウツギ	<i>Hydrangea paniculata</i>
ユリ	オオアマドコロ	<i>Polygonatum odoratum</i> var. <i>maximowiczii</i>
	ヒメイズイ	<i>Polygonatum humile</i>
	スズラン	<i>Convallaria keiskei</i>
	エゾゼンテイカ	<i>Hemerocallis esculenta</i>
ラン	エゾチドリ	<i>Platanthera metabifolia</i>
	ハクサンチドリ	<i>Orchis aristata</i>

すみやかに湿原の水量を減少させない方策をとることと埋めたてられた部分の土砂を除去しての復原を図ることが必要と思われる。

島嶼であることなどから利尻島は独特の環境と生物相を形成してきたが、利尻島においてはあらゆる分野で未知の事物が大部分を占めている。前述した種富湿原が利尻島内におけるエゾゴゼンタチバナの唯一の産地であることが確認されたように、今後の調査でも利尻島未記録種の確認や新知見が得られることは十分に予想されることであり、多様な環境を保全することは最重要事である。とりわけ湿原環境の保全は各

地で認識が高まる中、利尻島内の湿原の現状は憂慮すべき事態である。このような状況が改善されないままでは、利尻島の湿原や湿地は消失してしまう恐れさえもあり、わたしたちは身近な自然環境の大切さを認識し、その保全に最大限の努力することが必要である。

利尻島自然情報センターでは、残された湿原の保全や総合的な調査等をするため、1997年の春から湿原に木道の設置を計画している。種富湿原に近づき、そこに生息する生物やその景観について、復原の可能性を模索しながら多くの人々と考えたい。